

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

◆tel: 042-540-1663 / fax: 540-1687 (事務局)

tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)

E-mail: simin-siry@nifty.com

www.c-archive.jp

〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)

◆正会員 1 口 6000 円、賛助会員 1 口 3000 円 / 年

(30 歳以下：正会員 4000 円、賛助会員 2000 円 / 年)

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ



開館4周年記念講演会報告

5月27日(日)

# 「五日市憲法の発見と

## その現代的意義

―半世紀前の明治100年キャンペーンに抗して―

新井勝紘さん(元専修大学教授、当会会員)

「ネットワーク・市民アーカイブ」の4周年記念講演会では、新井勝紘さんをお招きしました。

1889年の大日本帝国憲法公布から遡ること8年、81年に起草された「五日市憲法」には、立憲主義や人権保障が盛り込まれていました。この草案が発見されたのが、今から50年前の1968年、政府による「明治100年キャンペーン」が喧伝されていた時代です。

「五日市憲法」発見者のお1人である新井さんに、発見当時のこと、草案内容をお話いただき、憲法改正への動きと「明治150年キャンペーン」とが同時に展開されている現在の政治情勢の中、五日市憲法がもつ意義と私たちが見失ってはいけない大切なことを伺いたいと企画しました。当日は、大変大勢の方にご参加いただきました。

### ●色川ゼミと明治100年

1967年、私は東京経済大学で日本史を担当していた



色川大吉教授のゼミに入りました。入学当初は歴史を専攻するなど考えもしなかったのですが、一般教養で日本史をとったところ、大変魅力的に感じて、「歴史はこんなに面白いものなのか」とすっかりはまってしまったのです。そこで教鞭をとっていたのが色川さんであり、この講義で使用されたのが、色川さんの最初の著書『明治精神史』でした。翌1968年は明治100

年にあたる年でした。当時は政府が進めていた明治100年事業に対して、賛成・反対とさまざまな意見が飛び交っていて、ゼミでも明治100年をテーマに議論していました。私も「明治100年問題研究会」という自主ゼミを立ち上げて呼びかけ文を書き、他のゼミ生に向けてガリ版刷りのチラシを配って訴えていました。

色川さんは明治の礼賛に偏った政府の事業には、それほどこの100年は素晴らしいのか、アジアの見本となるような100年だったのか、と猛烈に反発していました。授業でも「この100年間に日本は何回戦争したと思う？15回もやっている。しかも戦場はアジア諸国ばかりだ。どれだけの人が犠牲になったのか。こうした話を抜きにして『素晴らしい』という論理はない。光と影の両方の面を見ることができる。歴史を学ぶ学生ならばそもそも光の面が本当かどうかとも検証すべきだ」と話していました。

### ●1968年という時代

2017年、私が以前勤めていた国立歴史民俗博物館で

特別展「1968年―無数の問いの噴出の時代―」が開催されました。今振り返ると、1968年という年は日本近現代のターニングポイントとなる年だったのかもしれない。大学闘争、水俣、ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)など、民衆のさまざまな動きがありました。私も60年安保のときは高校生で、少し運動をかじったりもしましたが、あの時代はこのような運動が起こる社会の空気もあったのでしよう。

そんな1968年、私は色川ゼミの4年生になりました。先輩が三多摩地区の旧家を調査し、三多摩の自由民権運動をまとめていたこともあって、国の歩んだ明治100年でなく、足もとの多摩地域の100年をゼミで探求してみたいと申し入れました。

### ●自由民権運動時代の五日市

すると色川さんから「君らがそんなにやりたいなら、前から調査してみたい家があるから、交渉してみよう」と五日市の深沢家、八王子市川口で困民党にかかわった小池家、厚木市の大矢家を提示されました。

特に五日市の深沢家は、色川さんが1年ほど前に交渉して、立川短期大学で英文学を教えられている一彦さんに代替わりしていたこともあって、期待が持てました。そこで色川さんに交渉していただいたのですが、「長らく入っていないし、ガラクタシかない。学生に見せるようなものはない」と断られてしまいます。

けれどもそこで引き下がることはできませんでした。その理由は、ちょうどそのころゼミで読んでいた小田急電鉄創業者の利光鶴松の記した『利光鶴松翁手記』にあります。

大分出身の利光は、八王子警察署で巡査をしていたおじを頼って八王子で居候をします。おじが五日市に転動したことで2年半ほど利光も五日市に行くのですが、「あの時期、五日市で学んでいなければいまの自分はない」と後に語っているように、自由民権運動の風が吹き荒れていた時代に五日市で生活した体験が利光を大きく成長させます。

利光は五日市で勸能学校という公立小学校の先生をしていたのですが、自分は学問が足りないと感じつき、先生を辞めて明治法律学校(明治大学)で勉強し、弁護士となって、後に衆議院議

員にもなっています。そんな鶴松の手記によると、五日市は当時野党であった「自由党の巢窟」であり、深沢家にあつた相当量の蔵書はよそ者の利光でも自由に読むことができたと言われています。

### ●開かずの蔵での出会い

この手記を読んでいた上に、深沢さんも滅多に開けない「開かずの蔵がある」というので、簡単に引き下がることはできません。もう1回色川さんに交渉してもらい、なんとか深沢さんに

許可をもらって、土蔵の中を調査できたのが夏休み中の8月27日でした。そもそも私自身、土蔵に入ること自体が初めての体験でした。深沢さんは土蔵の中に裸電球を引いてくれ、かすかな光で探索しました。その2階で私は「五日市憲法」に出会ったのです。

薄葉紙という薄い和紙に墨書きされた24枚の綴り。ちよつと風が吹くと飛んでしまうような薄い紙で、虫食いもあり、ある部分は読めません。タイトルには「日本帝国憲法」とあり、最初「大日本帝国憲法」を書き写したのではないかと思いました。

明治期の自由民権運動は、国会や憲法をつくる動きでした。国会も何もない中で依拠されるのが憲法です。当時、全国各地で民衆が独自に憲法をつくる動きがあり、20くらいの憲法草案が知られていました。それらをすべて調べてみましたが、五日市憲法と同じものはなく、新しい憲法ではないかという結論に至りました。

### ●充実した国民の権利項目

ただ単に新しい憲法であったというだけではありません。五日市憲法を紹介する際に必ず取り上げられる「日本国民は各自

の権利自由を達すべし」という最初の条文は、現在の日本国憲法となんら遜色ないものです。まだ明治憲法に基本的人権がない時代、身分を問わず、法律上平等の権利があることも、すでに五日市憲法では説いています。

五日市憲法を卒業論文のテーマに決め、私はさらに研究を進めました。五日市憲法は、後に政治結社、嚶鳴社の憲法草案を下敷きにしたことがわかりますが、両者には違いもあります。たとえば五日市憲法には国民の権利という項目が36条あるのですが、嚶鳴社のものと同じものは1つもなく、全くのオリジナ

ルであることがわかります。こうした比較を通じて、五日市憲法がどこに力を入れていたのかを分析しました。大学だけで調査するのは間に合わず、毎日自宅に原本を持ち帰って調べました。

### ●千葉卓三郎の履歴書

ところで、この憲法は千葉卓三郎という人物によって起草されています。色川さんや五日市の人々に尋ねたらすぐわかると思っていたのですが、彼の存在は誰も知りません。どういう人物か追いつけたところ、1枚の履歴書にたどり着きました。千葉は嘉永5(1852)年に

宮城県、現在の栗原市の仙台藩の下流士族の家に生まれ、明治16(1883)年に亡くなっています。仙台藩というと、戊辰戦争で負けた側、賊軍です。千葉は17歳で志願して、戊辰戦争の最も激戦だった白河口の戦いに参加しました。

その後、ギリシア正教を学び、次にキリスト教が大嫌いな安井息軒に学んだかと思つたらカトリックを学び、福田理軒という数学者に学んでいきます。次いでマグレーという青山学院大学を開設した人物にプロテスタントを学び、麹町で商売をした後、五日市へ移り住んでいます。先に紹介した利光鶴松の前任として、勸能学校で教鞭をとっていました。

### ●五日市憲法から見る憲法の価値

千葉卓三郎も五日市憲法も、私が調査を始めた1968年の五日市の人びとは知られていませんでした。五日市の方にお話を伺うと、こう言われたことでもあります。「五日市は保守的なところなんですよ」「千葉さん個人で作ったものなんですよ」では、彼の痕跡は地域に何も残っていないのでしょうか。大正デモクラシーや戦後民主主義の時代の五日市はどうだったのでしょうか。たとえば、大正期



の政治結社、友愛会の鈴木文治は、五日市の印象として、「進取的気性に富んでいる。何かしら精神的によい潤いがある」町だと述べています。また、終戦直後に民主主義を掲げて立ち上がった団体、五日市新政会の会長を務めていたのは深沢一彦さんです。大正期以降も自由民権を復活させようとした動きが見受けられます。

そして現在、私たちは五日市憲法から何を学ばなければならぬのでしょうか。憲法は国を守る、国家のあり方を守るためのものというよりも、国民の生命や権利を守るためのものだと思うのです。改憲という動きの出る厳しい時代ですが、最終的には憲法をどうするかは国民が決めることになります。そんなとき、憲法の価値を判断する1つの材料に五日市憲法の存在はあるのではないのでしょうか。

最後になりますが、現代の民衆のさまざまな資料を集めている市民アーカイブの活動にもぜひ理解と注目をお願いします。

### 質疑応答

**Q** 千葉卓三郎は憲法というものをどのように身体的に理解していたのでしょうか。

**新井** 五日市憲法は突出した法知識をもっていった千葉と五日

市という土地柄の両者があったからこそ生まれたものだと思います。ことばでは表現しきれませんが、幕末から明治に至る大きな流れの中で、当時の人びとには現代の我々と違ったものが見えていたのではないのでしょうか。

**Q** 憲法は国民1人ひとりが考えなければならぬ課題だと思ふ。新井先生は今日のお話の先も考えておられると思ふが、どうでしょうか。

**新井** 戦後、憲法改正の動きがあり、その中で法制局長官が改憲者に力を貸しているという事実があります。それを示す資料がわが家にあり、NHKの取材を受けました。番組は日本国憲法がどういうものか考える1つの大きな問題提起をしていたのではないかと思います。

(記録・増沢航＝運営委員)

### 参加者の感想

・憲法のみならず、歴史を考える上で大変参考になる講演でした。

・五日市憲法発見時のお話など、具体的な体験談はとても興味深く伺いました。

・個人の尊重などの現憲法の大切な土台の水脈を五日市憲法から学びました。

・刺激的な内容でした。五日市憲法の普遍的価値がよくわかったのですが、その価値を発見するまでは、物理的な発見以上に興味深いものでした。68年当時は今のようにはコピー機も普及していなかったと思います。様々な憲法草案との比較作業など、どのようにに女性も位置づいていたのかが、気になるところです。

・千葉卓三郎は幕末からの人間で、江戸時代にすでに開明的思想が芽生えていたのだと思う。急に五日市憲法ができただけではないでしょう。

・五日市憲法草案発見にまつわる数多くの裏話、秘話を聞かせていただき、大変有意義でした。あきる野に住む者として、誇らしいと感じています。

・とても良いお話でした。今の時にぴったり。改憲反対を唱える今の憲法から改憲への危

険を話すだけより、五日市憲法を考えていた明治の人々の歴史をもっと明らかにすると良いと思いました。

・今後の生き方に役立つような大変興味深く拝聴しました。

・多くの多摩地域の人に知ってもらい、誇りになりたい。

・ユーモアあふれる新井先生の話しぶりは楽しかったし、自由民権運動から発案された憲法がいかに重要なものか、理解できました。

### 2018年度定期総会終了！市民アーカイブは5年目に

## 長期計画と組織基盤の強化が課題

5月27日(日)、4周年記念講演会の前の時間に2018年度定期総会も開催しました。

「市民アーカイブ多摩」開館から丸4年になりました。最初の1年目は開館するだけで

精いっぱい、2年目は「資料の活用」をキーワードに来館者を増やす努力をし、3年目は資料収集保存の体制整備に力を入れました。そして昨年は、運営組織の基盤強化を検討しました。

資料室は既にいっぱいになりつつあり、また整理も追いつかない状況です。新しい人

手や資料収集方針・将来の保存方法の検討など、今年も長期計画を含めた会の組織基盤の強化に向けて更に検討を続けていきます。

また、会の前身である「市民活動資料・情報センターをつくる会」(06年10月発足)から10年以上経過し、私たち自身の記録づくりもすすめます。

その他、例年同様に①「市民アーカイブ多摩」の整備・活用、②学習・研究活動、③広報活動、④組織基盤の強化、⑤他団体との連携、などに努めていきます。会員募集中です。

### 〈これからの催し〉

□「緑蔭トーク」第4期

・第3回 9月22日(土)

「戸籍と日本社会

―『国民』を縛り続ける制度」

・遠藤正敬さん(大学講師)

・第4回 10月13日(土)

「デジタルアーカイブの

構築と地域自治」

・津村智里(当会運営委員)

・会場：市民アーカイブ多摩

・時間：午後4時15分～6時

・資料代：300円

□「シリーズ「現場」を訪ねる③

「陸軍登戸研究所資料館を

訪ねる」

・11月17日(土)午後1時～

・訪問先：明治大学平和教育

・登戸研究所資料館

(小田急線生田駅から徒歩10分)

# 「三」コミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を、発行者の方に紹介していただきます。

## ムルレ (糸車)

「調布ムルレの会」の情報啓発誌会報『ムルレ』の発行は、市民講座（その結晶としてのシリーズ「一〜三号冊子化」と共に当会活動の二本柱といえます。その訳は、この『ムルレ』(千部)を持って、在日者(韓国・朝鮮人)家庭を回り、対話を旨としたからです。当初(一九八〇年一月・一号)は『ムルレの会』の表題で二七号まで発行(月刊)、八五年七月の一号から『ひとさしゆびに自由を』に改め五〇号まで発行(月刊)、八九年一月から更に改題『ムルレ』一号を発行(隔月刊)して今日に至り、二〇一五年四月からは季刊となった次第です(二〇一八年四月現在一六五号)。形は当初がA3ガリ版表裏

の二頁で、次第にB5版の四頁に変わり現在に至っています。編集内容は、一頁は巻頭言で、主に運営委員が持ち回りで執筆、四頁は会としてのお知らせや思いを旨とし、二〜三頁が市民講座の感想・主張・他グループの紹介・旅行記とか様ざままで、会の本旨をいかに共有して行くか、に腐心しています。

なぜ『ムルレ』なのか。名は一五世紀朝鮮から移入された糸車でして、私たちにとっては両国を繋ぐ絆の象徴の意にあります。「調布」とはかつて繭(まゆ)から糸車で糸に紡ぎ、それを多摩川に晒し「綱とする名に由来し、古代朝鮮高句麗系が渡来定住した高麗江(狛江、江川多摩川)郷に属し、深大寺は朝鮮の高僧開祖寺といわれます。近代では関東大震災頃から多くの朝鮮人が来日して多摩川砂利採取に従事し、果ては調布飛行場、軍需工場(今の東芝府中)、(東京競馬場、中島飛行場等の建設・肉体労働者)多くは強制連行者として従事していました。私が調布市に勤めた六〇年代でも、多摩川(元河原)に三千人近い人が定住(朝鮮人部落)し、職がな

## はちとび

八王子の印刷会社、(株)清水工房は清水英雄が八王子で創業して以来、来年(2019年)で50周年になります。お客様の多くは市民の方で、出版している書籍も八王子にまつわるものが多く、地元とともに歩んできました。

八王子へのこだわりを十二分に活かしたのが、1995年12月に刊行を開始したタウン誌『One Two えいと』です。たとえば創刊号の「あ」の号であれば、「浅川」「藍染」「有田焼」といった具合

い失対従事者も多く、税金は日本人並に納めながら国民健康保険すら加入出来ない状況にあったのです。七〇年初頭にこの差別構造を問題とする有志各人が個別に活動を始め、七九年一〇月、特に国民年金加入を求めて(漸く健康保険加入は認められた)会を結成しました。会員は四〇〜七〇名。

八一年から始めたハンゲル講座も会入会を条件とし(民族の心を学ぶ)、韓国ムルレの旅を行い、また韓国学生・若者や、在日者・留学生との交流等を行って参りました。近時益々差別構造が潜在化し、陰湿に噴出レイシズムが横行する今、特異な会として人権に固執し、日本人の罪責に帰する問題―天皇制社会下、個を殺して和に生きる恥の文化(精神構造)と対峙するものです。(坂内宗男)



・創刊2007年、10,000部、A4判、16頁、カラー、年3回発行  
 ・八王子市内各所に無料配布  
 ・tel: 042-620-2615  
 ・当館所蔵: 1-39 (『One Two えいと』1-45号)  
 ▽39号内容 = 「防災意識を共有しよう」「消防車製造1世紀の重み」「八王子の災害史」他

に、頭文字に「あ」のつく市内ゆかりのトピックを取り上げ、50万都市でありながら、どうしたわけか八王子には市民が主体となったタウン誌が根づかないといわれています。そんな中で『えいと』誌は市民が取材を担当し、定期購読による財源での発行を目指しました。運営は厳しいものでしたが、最低限の目標だった「あ」の号から「ん」の号まで全45号を発行し、07年3月に終刊しました。

この『えいと』誌の終刊から間髪を入れずに刊行したのが、地域情報誌『ちよっと気になる八王子マガジン』はちとびです。いま、世の中にはさまざまな情報があふれていて、数多のフリーペーパーも発行されていますが、記事広告や広告そのものがメインの紙面が多く、記事として読み応えのあるものは少ないように思えます。1つのことがらを掘り下げて取材し、八王子地域の活性化を誌面から発信しつつ、読者が保存しておきたいと思うようなフリーペーパーづくりはできないものか、そんな考えで発刊にいた

りました。当初は季刊でしたが、12年から年3回の発行です。全体の構成としては、前半がテーマにまつわる内容を深く掘り下げる特集で、最新号では「防災」について紹介しました。これまで、木、医療、市制100周年、駅といった具合に、幅広いテーマ設定を心掛けています。後半は市民団体の紹介や八王子の歴史・民俗にまつわるコラム、書籍案内、イベントカレンダーなどの多彩なコーナーを設けています。

幸い39号に至るまで、協力いただいている市の公共施設、道の駅、観光協会、商工会議所、書店や商店などに置いていただき、市民の反応も上々で好評を得ています。また、熱心な「はちとび」ファンも登場し、頻りに情報を提供していただいたり、私たちの手の回らない範囲まで配布のお手伝いをしていただいたりしています。

- ・創刊1980年、1000部、B5判、4頁、モノクロ、年4回程度発行
- ・年会費3000円
- ・tel: 090-2336-6243
- ・当館所蔵: 74-163号, 市民講座記録1-13号
- ▽163号内容 = 巻頭言、マダン「鐘路老人総合福祉館との交流記」、 「えっ! 差別・排除が適法なの?」、ハンゲル講座等催し案内他

共に生きる會・社会を目指して

## ムルレ

1980年12月31日

The Cho-fu Korean Community Center

調布受刑の会  
会報『ムルレ』発行に当たって

調布受刑の会は、在日韓国人の生活改善と、相互理解の促進を目的として、1980年12月に設立された。この会報『ムルレ』は、会の活動の中心となる。『ムルレ』は、在日韓国人の生活改善と、相互理解の促進を目的として、1980年12月に設立された。この会報『ムルレ』は、会の活動の中心となる。

来年の50周年事業に向けて、いま以上に市民の皆様との連携を強固なものとし、八王子の活性化に微力ながらも寄与できればと考えています。(増沢航)

市民アーカイブ多摩の  
資料棚から⑨  
〈子ども・児童福祉〉

日本国憲法施行後、すぐに制定された児童福祉法(1947年)は、憲法25条の「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」が「すべての児童」にも当てはめること、そしてそのための行政の義務を明記した。戦争で保護者を亡くした子どもが多く、子どもの生きる権利の保障は目前の課題であった。それから70年が経過し、その間に児童福祉法は何度も改正されたが、2016年に初めて第1(3)条の理念が改正され、「子どもの権利条約」の精神が盛り込まれた。子どもが「保護される客体」から「権利の主体」と位置づけられたのである。

当館の分類番号67(子ども・児童福祉)に収集されている68ファイルを抜粋して紹介する。

■「子どもの権利条約」を活かす

89年に国連で採択され、94年に日本でも批准した「子どもの権利条約」を絵に描いた餅にしない活動が継続されている。国内外の子どもの状況を把握し、子どもの権利条約の実現・普及のために活動する『いんふおめーしょん』(子どもの人権連)。権利条約・南の子

も支援・開発教育を進める『NGO子夢子明』(国際子ども権利センター)。子どもの権利について研究や集会を開催する『子どもの権利条約・東京市民フォーラムニュースレター』。子どもの意見表明・参加支援や全国各地の子どもを主体にした活動の交流を測る『子どもの権利条約』(子どもの権利条約ネットワーク)。いじめ裁判や触法少年事件の弁護活動など『子どもの権利通信』(日本弁護士連合会子どもの権利委員会)。地域で子どもを中心に活動する『こいのち通信』(世田谷こどものいのちのネットワーク)。子どもに関する政策への提言等も行う『子どもを守る』(日本子どもを守る会)。子どもに関わるNPOをつなげる『日本子どもNPOセンターニュースレター』他。

■「権利侵害から守る」

CAPの出前授業や子どもの声を掲載する『おとなびろば』(市民共同学習プロジェクト子どもひろば・CEP)。虐待防止・発見活動と支援活動をする『子ども虐待を考える会通信』。子どもの電話相談を展開する『チャイルドライン支援センターNews Letter』、『もしもし、あのね』(チャイルドラインむさしの)、『はなま

る』(子どもネット八王子)。児童買春等の世界の子どもの実態等を発信する『Free The Children Japan News Letter』。すべての子どもに機会と夢を！と支援活動する『Chance for children』。よりよい保育園づくりを保護者がつながること目指す『つつしん』(保育園を考える親の会)他。



■「里親制度をもっと知って」

里親として日常の里親情報を掲載していた『文化通信フォスターペアレント』(個人)、世界の里親制度等を紹介し、里親をつなぐ『こんにちは！通信』(東京養育家庭の会)、18歳以降の里子・里親を支援する『アン基金』(里親子支援のアン基金プロジェクト)他。

■「子どもが主人公になれる場を」

北海道の森の中で毎年子ども村を開催する『森の子ども村つつしん』。子どもを中心にした活動『東京の子ども会・少年団』(東京少年少女センター)、『月刊子ども会新聞』(東京都子ども会連合会)、『日本冒険遊び場づくり協会』。地域でプレイパークを展開する『やっほー』(冒険遊び場の会・国分寺)、『どろんこ通信』(地域にプレイパークをつくる会・日野)、『地域冒険学校』(八王子)、『ためき山通信』(子ども広場あそべこどもたち・町田)、『くーねるあ・そ・ぼー』(小金井にプレイパークをつくる会)。畑づくりやおはなし会などを開催『おひさまはらっぱ』(日野)。子どもや青年の居場所からの発信『libyのひみつ』(東京YMCA)、『おおほらファミリィ』(品川区大原児童センター)、『ともくるポスト』(多摩市永山児童館)、『あそまな』(新宿子どもセンター)他。

■「子育て支援・情報誌」

90年代から盛んになった子育て情報紙。草分け的存在の『ままとんきつず』(川崎)、孤軍奮闘する親の力になりたい！『おきらくだより』(ひろばおきらく)、『子育て世代を応援するフリーマガジン『ココハピ』(カッセ KOGANEI)、小金井子育て生活情報誌『KOKOプレス』(K

OKOぷらねっと)、『きらら通信』(子育てサポートきらら・小平)、立川のママがつくる情報誌『ほほえみ』、『あいあい通信』(ウイズアイ・清瀬)他。

子ども家庭・子育て支援センターからの情報『ふうせんとんだ』(国分寺)、『ほかほかー子育て広場情報』(国立)、『支援センターだより』(小平)、『おひさま広場』(地域子ども家庭支援センター南大沢)、『プレーメンの庭から』(バオバブ保育園・多摩)、『たんぼぼだより』(たんぼぼひろば・多摩)。行政からの啓発紙『家庭教育通信』のびのび育つ子』(多摩市教育振興課)、『ひとり親 Tokyo』(東京都ひとり親家庭福祉協議会)、『次世代育成支援ニュースレター』(厚生労働省)他。

この他、分類70「教育」、73「学校教育」、33「女性」、60「福祉」、64「障害者」にも子どもの視点を大切に発行する通信もある。

脱学校論を唱えたイヴァン・イリッチは、70年に「個々人にとって人生の各瞬間を、学習し、知識・技能・経験をわかち合い、世話し合う瞬間に変える可能性を高めるような教育の〈ネットワーク〉をこそ求めるべきなのである」と主張した。「子どもを中心に、そんなネットワークの実践の力を見ることができる。」

(鈴木清隆)運営委員



ようと農民運動に参加するが、検挙され投獄。出獄後は自ら農村（鶴川）に定住し、図書館から民主主義の砦を築こうと、1939年に私立南多摩農村図書館（68年に鶴川図書館に改称）を開設した。妻の浪江八重子は助産婦資格を取得し、「浪江助産院」を開業、村にとっては欠かせない人たちになっていったのである。

南多摩農村図書館は、鶴川駅からバスで10分ほどの住宅街の中に現在も佇んでおり、一時は保存運動も展開されたが叶わず、残念ながら取り壊されたと伺った。

館内も当時の趣が残っており、玄関で靴からスリッパに履き替え、浪江の長女の野沢陽子さんからお話を伺った。建物の天窓は、八王子で「ふだん記」運動を展開されていた橋本義夫夫妻の助言であること、本が落下することを防ぐために、浪江が日曜大工で本棚に傾

斜を付けたこと、大きな2台のテーブルは、休館日には卓球台に変わったこと、開館日は夜9時まで開けており家族が交代で当番をしたり、戦中の疎開先となっていた鶴川には、神近市子など知識人もおり、図書館の運営にも参加。山代巴も一時期住んでいたなど当時のエピソードを伺うことができた。

89年の閉館後、図書類の多くは町田市立図書館に引き取られたが、まだ多くの図書や雑誌が残っていた。浪江家に関する文書類ダンボール約130箱は、町田市立自由民権資料館に移管、整理中である。

◆町田市立自由民権資料館



多数輩出した地域であり、資料館の敷地も村野常右衛門という民権家の所有地で、市に土地と資料が寄贈されたことがきっかけになり、建設された。職員2名、学芸員4（うち非常勤3）名、アルバイト2名で運営している。所蔵している資料類は、江戸時代から現代までである。閲覧室には自由民権期の新聞が2段分もある。この閲覧室は、講座室としても活用されている。常設展示は、古文書類の展示が中心だが、農民たちがなぜ民権運動にかかわるようになったかの展示もあり、幕末・開港期の農民のおかれた状況や当時の社会体質がうかがえる。

◆私立南多摩農村図書館

市民活動資料には、それぞれの時代をそれぞれの場所で生き抜いた人びとの喜び、苦しみ、怒り、理想が、さまざまに込められている。そうした資料が生まれた「現場」はいまどうなっているのか。2017年11月23日、「シリーズ『現場』を訪ねる」第2回を開催した。

この日は朝から氷雨に見舞われたが、16名が参加した。浪江虔（1910～1999年）は、昭和恐慌の時代に地主に抵抗する小作農民を支援し

午後からは、農村図書館から徒歩20分ほどの町田市立自由民権資料館に移動し、館の学芸員で当会の運営委員でもある杉山弘から説明を受けた。同館は1986年開館。自由民権運動や町田の歴史に関する資料を中心に展示・保管している。自由民権運動の「壮士」と呼ばれた人々を

普段は入れない収蔵庫も見学した。収蔵庫入口には鉄扉があり、入ると燻蒸も行われる前室がある。燻蒸は年に1回で、虫が羽化する前の6月に行う。ドーム型のテントに資料を入れ、二酸化炭素ガスに浸すとのこと。その後、収蔵庫に移された資料は、中性紙封筒や

箱に納められていた。かつて教科書裁判を起した故家永三郎が収集した明治期図書コレクションもあった。閲覧室に戻り、浪江宅から寄贈された文書類を皆で広げた。

浪江の農民運動当初の資料や戦中の資料は少ないが、2回目の逮捕時の裁判関係や、獄死した兄・敬に関する書類などもあった。また、戦前に刊行されていた図書館報などもあり、貴重な資料を手にとって見ることができた。

◆浪江虔の思想を、場と資料から辿る



南多摩農村図書館内で説明する野沢陽子さん

今回の「現場を訪ねる」は、浪江が居住し、実際に図書館を開館した場所で話を伺った後、浪江が遺した資料群を見ながら、当時のことを想像しながら資料を読むことができた。浪江が移住し、農村図書館を建てた地域は、半世紀遡ると、同じような志をもった先達がいなかったことも偶然とは思えない。次の時代へのバトンを受け取った私たちが、諸先輩の思いを辿りながら、時代を越えて思いを共有した貴重な1日となった。

（中村修二運営委員）

# 第4期 緑蔭トーク報告

市民アーカイブ  
多摩では、今年度  
も緑蔭トークを開  
催しています。  
今号では第4  
期・1回の報告を  
掲載します。

第1回 4月28日

## 日大闘争の資料を 国立歴史民俗博物館へ 寄贈して

矢崎 薫さん(日大全共闘)



生たちが追求  
した公開性や  
大衆性が反映  
している。同  
時に、日大芸  
術学部が学生  
が運動に参加  
していた強みを、  
矢崎さんは臨  
場感豊かに解説された。

### ◆人それぞれの日大闘争

「闘争している時にへ落としどころはあったのか」という問いに、矢崎さんは、「自由に集会をすること・ビラをまくこと」

てうるま新報(現琉球新報)社長に就任するが沖縄人民党の結成に参加したことで、米軍の圧力で辞任。52年の第1回立

### 記憶と記録の場をめぐる旅⑩

## 不屈館

—瀬長亀次郎と民衆資料—

平和で基地のない沖縄を！



が、または占領軍により追放・被選挙権も剥奪された。市長在任期間は1年足らずだが、那覇市政をめぐる米軍との攻防は、沖縄県民の絶大な支持を得た。被選挙権を回復した後、68年には第8回立法院議員選挙当選、70年の沖縄初の国政参加選挙で衆議院議員に当選。以降7期連続当選を果たした。

### ◆平和運動の拠点として

館の名称である「不屈」は、瀬長が好んで使い、自分にも、そして今も諦めず声を挙げ続ける沖縄の人たちへの尊敬の念が込められている。

館は会員により運営されており、瀬長の書斎が復元され、彼の主張、活動、全国から寄せられた激励文などが所せましと陳列されている。現在の辺野古や高江の映像が流れ、報告

## 不屈館

—瀬長亀次郎と民衆資料—

- ・所在地： 沖縄県那覇市若狭 2-21-5
- ・Tel： 098-943-8374
- ・アクセス： 県庁前駅から歩 15分
- ・http://senaga-kamejiro.com/
- ・休館日： 火曜日、年末年始
- ・開館時間： 10時～17時  
(入館は16時30分まで)
- ・入館料： 大人500円、大・高校生300円、中学生以下・障害者無料

2017年秋、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館では、「1968年―無数の問いの噴出の時代―」と題する、68年社会運動を資料で回顧する企画展示が開催された。50年という節目を迎えて企画された展示は、大きな反響を呼び、20代、30代を含む多くの人が足を運んだ。

◆映像資料を見ながら  
当日は、資料映像「日大闘争」(日大全共闘映画班、68・69を記録する姿)を上映しながら、話を伺った。

1968年度初め、大学側の使途不明金問題が明るみに出て、5月、学部を越えた全学共闘会議が結成された。大学当局と

の大衆団交、バリケード内での学習会や文化活動、そして街頭デモ。厳しい状況にも関わらず、それらが運動当事者の手によつて映像化されていること自体が、見る者に改めて強い印象を与えた。こうした資料がつくられたこと自体、日大闘争で学

沖縄県庁から歩いて15分。目の前に那覇港が広がるビル

の1階に「不屈館」がある。資料館に入ると瀬長亀次郎(1907～2001年)の澄んだ目をした大きな写真に迎えられる。昨年作成されたドキュメンタリー映画「米軍が最も恐れた男その名は、カメジロー」(監督・佐古忠彦)は、沖縄での人気は衰えず、ロングラン上映されている。

沖縄の祖国復帰と平和な社会の実現を目指して闘った瀬長が残した資料を中心に、沖縄の民衆の闘いを後世に伝えようと2013年に市民が開館した。

### ◆何度も立ち上がる瀬長

瀬長は、戦前は労働争議を指導して治安維持法違反で検挙され投獄、戦後は新聞記者を経

### ◆資料が残る/資料を残す

「闘争」を美化するわけでもなく、突き放すわけでもなく、穏やかに語る矢崎さんの言葉が印象的であった。メンバー間の違いを受け入れつつ、しかし理想を忘れない。そうした距離感で語ることが出来るまでには、50年近い歳月が必要であったのだろう。「資料が残ること/資料を残すこと」は、独特の力を当事者にも、また後世の人びとにも、もたらしてくれることを感じる機会にもなった。(町村敬志代表)

会や連続講座も開催、現地へのフィールドワークも組まれる。県民の4人に1人が亡くなった沖縄戦から73年。未だに米軍基地を押し付けられ、更に新基地を作ることを強い、「不屈」の運動を続けている沖縄の歴史と現状を、1人でも多くの人に知って欲しい。市民の思いがこもった資料館である。(江頭晃子代表)

# アーカイブ多摩 10 年誌

## ◆寄贈団体・個人の方の来訪

資料をご寄贈くださったっている個人や団体の方にもご来館いただいています。ご自身の資料ファイルを確認され、同じ分類にある他団体のミニコミを閲覧した後は、スタッフ・ボランティアと市民活動談義に。日頃は資料を通してのお付き合いですが、実際に活動されているの苦労や大切にされていることなどのお話を伺うことで、資料の見方がより深くなっています。

## ◆2017年度データ

総会で報告のあった市民アーカイブ多摩の17年度の数字データを一部ご紹介します。

- ①開館日74回。②来館者数94人。③データ入力数5065点（通信などのミニコミ1点ずつをデータベースに入力した数）。

④新ファイル作成135タイトル。寄贈等により新しくファイルを作成した数です。総数のファイル種類は1707タイトルになりました。

## ◆18年度体制と運営委員会

運営体制は17年度と変わらず12人の運営委員で活動します。正会員の皆さまには自由に参加していただける形で、毎月第3金曜日の19時～21時。偶数月はまちだ中央公民館（町田駅歩）、奇数月はシビル（立川駅歩）で開催しています。多くの方の知恵が必要です。ご参加、お待ちしております。

## ◆資料、継続ご寄贈のお願い

市民組織や個人が発行している通信や会報（ミニコミ）を収集しています。継続的なご寄贈をお願いします。

資料整理ボランティアも募集中です。細かい作業ですが、魅力的な資料群に出会えます。

## 運営委員会など

- 2月16日 第11回運営委員会。参加者7人。会員増減・カンパ者、「市民アーカイブ多摩」当番確認、利用者対応等報告（以上毎回）。17年度活動の振り返りと反省・議案作成分担、第4期緑蔭トーク企画。
- 3月16日 第12回運営委員会。参加者8人。新規助成申請検討。18年度総会準備、17年度活動報告確認、18年度活動計画検討。
- 4月20日 18年度第1回運営委員会。参加者7人。天井板補修、18年度総会・講演会・緑蔭トーク役割分担、議案書・助成金申請検討。
- 4月28日 第4期緑蔭トーク①開催。参加者17人。
- 5月18日 第2回運営委員会。参加者7人。18年度総会・講演会参加申込み状況報告・対応。新パンフレット最終確認。部会報告他。
- 5月27日 18年度総会開催。参加者17人。講演会開催。参加者多数。
- 6月15日 第3回運営委員会。参加者9人。18年度総会・講演会反省。代表互選。各部会の課題と18年度の分担検討。

## 会員数（2018年6月）

- ・145人（正会員58、賛助会員87）
- ◆新規入会ありがとう（敬称略）
- ・正会員 川平景子
- ・賛助会員 小田亜佐子、後藤祥夫、小林信枝、菅原敏夫、富窪高志、鳥居明久、中野政子、横田忠夫

## カンパありがとう

（2018年2～5月）

- 新井勝紘、加藤敏治、神屋敷和子、小林信枝、鈴木美和子、高木恒一、竹内良男、富窪高志、富田美樹子、中村光一、浜地田鶴子、古坂容子、堀内寛雄、町村敬志、松鶴光子、三浦健、矢崎 薫、和田安里子、匿名2人（50音順・敬称略）

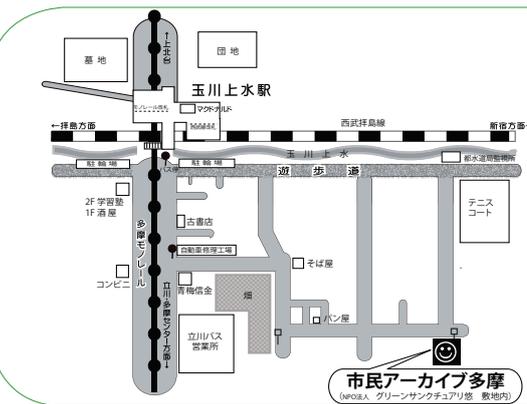
## 来館者・参加者の声

- ・シニアになった学生運動世代の熱意とサイフを上手に取り込むと良いと思う。
- ・大切な働きと思えます。何があっても続けていってほしい。
- ・緑蔭トークは、少人数で、リラックスできる環境だった。
- ・自分の親世代の1930年代前半生まれだった人、例えば半藤一利、上坂冬子、石原慎太郎、小田晋、曾野綾子などの考え方にとても大きな違いがあることに関心があります。批判するのは簡単ですが、何故、こんなになつたのか、一人一人のたどってきた生きざまに沿って理解するのを感じます。

## 編集後記

新井勝紘さんに語っていただいた「五日市憲法」のように、あらゆる資料には物語がある。「アーカイブ通信」では、毎号ただ資料を紹介するだけでなく、その物語を受け止め、伝えていくプロセスも紹介しているつもりですが、果たして？（江・鈴・湯・増）

市民アーカイブ多摩 ⑮  
緑蔭トーク  
作：りんご 絵：春山紅子



## 市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（8月中旬・年末年始の休館あり）
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分）
- ・電話& fax：042-536-5535（電話は開館中のみ）
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報など）1700タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。  
www.c-archive.jp